

増養殖技術開発事業 アワビの放流技術

勢村 均、山田 正

前年度に引き続き、本年度もアワビ4種の標識放流、追跡調査を実施した。

方 法

調査区域は前年度と同様の大社町御碕地区の20×20mの転石場とし、1993年5月に標識を装着した4種のアワビ稚貝を放流した。稚貝の概要は表1に示す。

表1 アワビ放流稚貝の種類、生産された場所、および殻長

種類	生産地	平均殻長 (mm)	放流個数
エゾアワビ	徳島	33.0±1.5	440
クロアワビ	隠岐	32.2±2.7	337
マダカアワビ	隠岐	33.6±2.5	462
メガイアワビ	益田	29.8±1.6	193

調査は放流後2、8、16、25、164日目に行ない、ダイバーは区画ごとに発見したアワビの種類、番号、位置、付着部位を記録し、発見した死殻を全て持ち帰った。ただし、調査区付近で7～10月に漁港の改修工事が行われ、調査区が岩盤の掘削および礫の堆積により大きく影響を受けたため、放流後164日目の調査をもって調査を終了した。

結果および考察

放流アワビの発見率および死殻累積回収率の経日変化を図1に示す。

発見率は放流後急減し、2日目で39～63%、8日目で33～46%、16日目で28～32%、25日目で16～32%、164日目で1～7%となり、クロ、マダカでやや高い傾向があった。死殻の累積回収率は放流後25日目で13～32%となり、特にメガイで高い値となった。これは放流前の標識装着作業時の麻酔処理の下手際でその後数日のうちに稚貝が死亡し、その弊死率はエゾ、クロ、マダカでそれぞれ2、10、14%であったのに対し、メガイは56%と大きく影響を受けたため、この死亡が放流後も継続したものと考えられた。

表2に放流アワビ死殻の被食害割合を示す。

マダコによる食害の他、今回初めてオニヤドカリによる食害が確認され、その死殻は放流直後に多いことから、食害は放流直後で大きかったと考えられた。マダコによる食害はエゾ、クロで高く、オニヤドカリによる食害はマダカ、エゾで高い傾向があった。

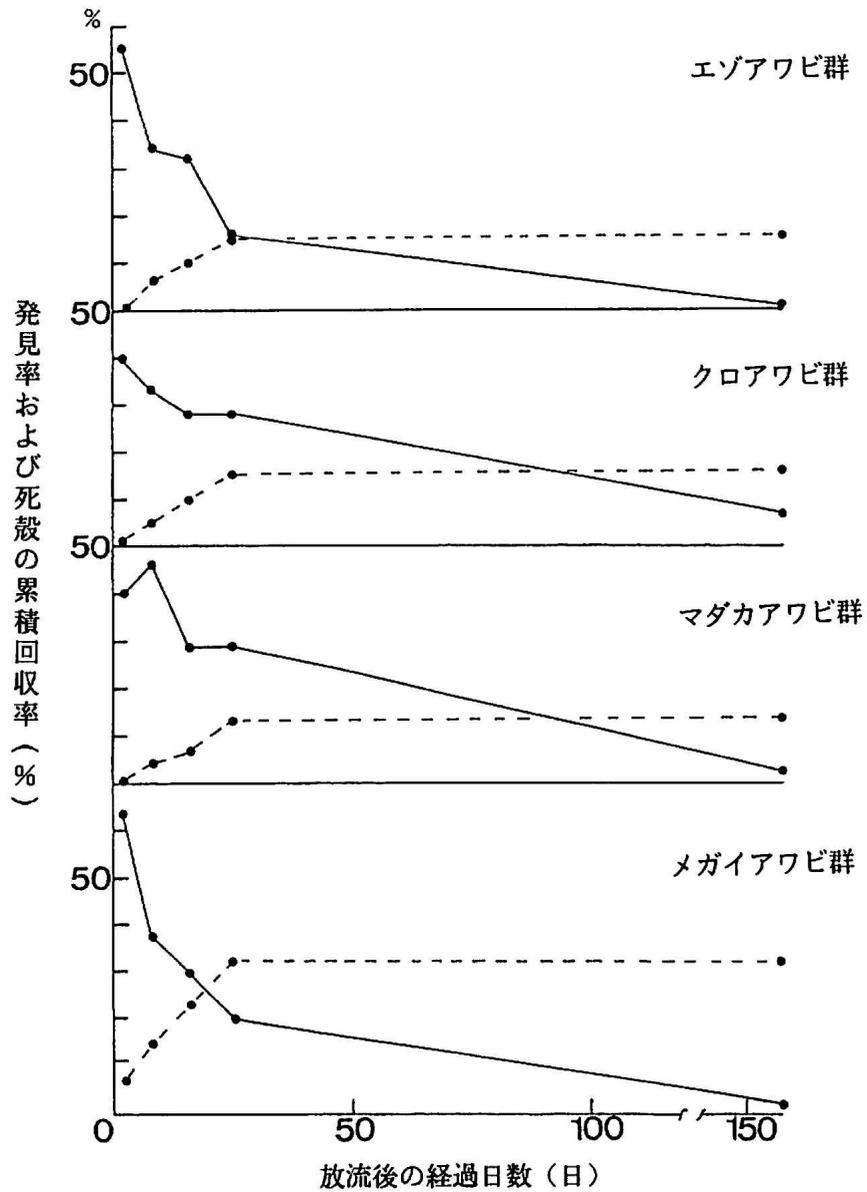


図1 放流アワビ発見率および死殻累積回収率の経日変化
(実線：生貝の発見率、点線：死殻累積回収率)

表2 放流アワビ死殻の被食害割合(食害のある死殻数/総死殻数 単位%)
調査対象：放流後2～25日目

種名	エゾ	クロ	マダカ	メガイ
マダコ	16.9	16.0	8.8	3.4
オニヤドカリ	23.1	16.0	36.8	18.6
計	40.0	32.0	45.6	22.0

表3にアワビ放流稚貝の生息場所を示す。

例年と同様にエゾは他の種と異なり、転石、岩盤の表面に付着する傾向があった。メガイについても例年と同様には転石下面に付着する傾向があった。

表3 放流アワビの生息場所

対象：放流後16、25日目 単位%

	転石地帯				岩盤地帯		
	下面	接点	上、側面	転石計	穴、亀裂	表面	岩盤計
エゾ	25.9	24.1	15.4	(65.4)	14.8	19.8	(34.6)
クロ	56.2	20.8	12.1	(89.1)	8.7	2.2	(10.9)
マダカ	55.1	20.5	13.0	(88.6)	7.5	4.0	(11.4)
メガイ	73.1	18.3	5.8	(97.2)	2.9	0	(2.8)